

# 『黒沢家の家じまい』

作 四方田直樹

## 【登場人物】

黒沢和子（くろさわかずこ） 61歳。長女。飲食関係の仕事。根無し草。――和子  
引間恵子（ひきまけいこ） 59歳。次女。専業主婦。実家の近所に住む。――恵子  
鈴木結（すずきゆい） 41歳。三女。会社員。東京に暮らす。――結  
鈴木浩史（すずきひろし） 37歳。結の夫。会社員。――浩史  
引間実（ひきまみのる） 60歳。恵子の夫。――実  
引間優一（ひきまゆういち） 33歳。恵子の息子。実家暮らし。フリーター。――優一  
引間つぐみ（ひきまつぐみ） 27歳。恵子の娘。県内の都市部に住む。――つぐみ  
荒井静枝（あらいしずえ） 64歳。和子たちの母の妹（叔母）。――静枝  
小林かな（こばやしかな） 40歳。結の幼馴染。東京に出ていたが帰郷。――かな

## 「上演を検討される方へ――改変について」

この戯曲は埼玉県西部の山間の地域を舞台にしていますが、上演するにあたって、別の地域、たとえば上演をされている地域やご出身の地方などへ設定を変更いただいても結構です。

具体的には

- ・作中に登場する地名
- ・作中に登場する方言
- ・作中に登場する盆踊り

について変更・潤色に際して、軽微な改変と同様に変更を許可いたします。

「黒沢家の家じまい」

埼玉県の山間部。関越自動車道の最寄り出口から車で40分弱。

山の裾野が迫る集落。

黒沢家があった場所。父母が亡くなり、一男二女の兄妹の中で長男の黒沢勝治（くろさわまさはる）が一人で住んでいたが7年程前に他界。

しばらく、空き家となっていたが最近、家屋を解体し更地になっている。

3月の日曜日。正午手前。

晴天であるが強めの風が吹いている。

まだ肌寒い。

引間恵子、実夫婦がやってくる。

実は手に一斗缶で自作した薪ストーブを持っている。

恵子は薪をかくためのトングを持っている。

実 「うゝさみい」

実が足をとめ、恵子を見る。

実 「ここいらでいいかさ？」

恵子 「いいんじゃないねえ？」

実、一斗缶ストーブを地面に置き、着火用ライターで薪に火をつける。

薪の火が落ち着くのを見守る二人。

恵子がタバコを取り出し口にくわえる。

実が恵子のタバコに着火用ライターで火をつける。

恵子、煙を吐く。

実 「わりに風があんな」

恵子 「なあ」

一斗缶ストーブの薪の火も安定してきた様子である。

実 「火も良さげになってきた。んじや、静枝ちゃん迎えに行ってくんべエ」

恵子 「頼むんな」

実が去って行く。

恵子は暖を取りつつ、手に持ったトングで薪をつつきつつタバコを吹かしている。  
少しして

自動車がやってくる音。

鈴木結、浩史が使用している自動車。更地の側に路上駐車した様である。

車から降りるドアの音がする。

鈴木結、浩史がやってくる。浩史、手土産（高級な羊羹）の入った紙袋を持っている。

結 「えー……！本当に何にもなくなってる」

浩史 「わー広い」

結 「えー……ショック！」

結が実家のあった土地をぐるぐると歩き、状況を把握しようとする。

浩史は少し離れた場所にいる恵子に挨拶する。

浩史 「こんにちわー」

恵子 「いっしょいー」

結 「（浩史に）庭の木まで無い。真っ平。桜があったんだよう？話した事あったよね？」

浩史 「聞いたかな？」

結 「つつじなんかもあったんだよ。あと、えっと、木。いろいろ」

浩史 「山が近いねえ」

結 「紫陽花もあった。思い出した」

結、涙ぐんでいる。

浩史 「びっくりだよ。生まれた家がなくなっちゃったんじゃ」

結は頷き、涙を拭う。

浩史 「お姉さんに挨拶したいな」

結 「うん」

二人、恵子のもとへ歩いてゆく。

恵子、タバコを一斗缶ストープに投げ捨てる。

結 「こんにちは」

恵子 「車どうしたんよ？」

結 「シェアカーだよ」

結は改めて実家があった敷地をぐるりと見る。

浩史 「お姉さんご無沙汰してます」

恵子 「はるばるどうも。」

浩史 「ご無沙汰してしまって。あのこれ」

浩史が手土産の紙袋を恵子に差し出す。

恵子、紙袋を受け取りながら

恵子 「気を使わなくていいんに」

恵子 「良いやつでしょ。羊羹」

浩史 「どうせなら自分の好きなものと思ひまして」

結 「タバコなんて吸ってんの」

恵子 「ずっとやめてただけどね」

結 「吸ってたの？」

恵子 「高校生んとき？」

結 「何それ」

恵子 「お父さんの介護してるときに吸うようになってヨオ。やめられねえんだわ」

結 「……ふうん」

恵子 「長生きしてえわけでもねえしよ」

結 「いやいやいや」

恵子 「悪かったんね。勝手におっ壊しちゃって」

結 「家？……任せてたから。お姉ちゃんに……結局誰くるの？」

恵子 「ん？」

結 「今日。お墓参り」

恵子 「アンタたちとうちら夫婦と静枝ちゃん。今、うちの人を迎えに行った」

結 「(浩史に) おばさん」

浩史 「お父さんの妹」

結 「ブー。お母さんの」

浩史 「妹さん。静枝さん。結さんのお母さんの妹」

結 「そ。(恵子に) 優一くんをつぐみちゃんは？」

恵子 「優一は居るけどアルバイト中。つぐみはわかんないね。行けたら行くみたいなの？  
来ないんじゃない？」

結 「甥っ子姪っ子」

恵子 「子って歳でもねえけどね」

結 「いい大人になっちゃって」

結がストーブの火の上に手をかざす。

結 「火いいね」

浩史 「懐かしいですね」

恵子 「うちのが用意したんよ」

結 「実さんが？ へー。なんかあるの？」

恵子 「アンタのためだよ」

結 「私の？」

恵子 「元はといえばアンタがここを見たいって言い出したから、じゃあお彼岸には早ええけど集まってお墓参りするかってなったんだんべえよ？」

結 「そうだけど」

恵子 「アタシは別に、こんないいって言ったんだけど。『結ちゃんは更地にしたんに

色々思うところがあるだろうから、気が済むまで見させてやんべえや』なんてさ。

「そうすつと寒かんべえな」なんて。こつ言っんはマメなんな」

結 「そつなの？なんかごめん」

恵子 「余計なお世話だった？」

結 「うっん。あとで実さんにお礼言っとく」

結は実家があった土地を眺めながら

結 「じゃ、ちょっと見させてもらうね」

恵子 「お昼の出前12時30分で頼んでるから」

結がスマートフォンで時間を確認する。

結 「二時間くらいか。オッケー」

結が浩史の手を引っ張って、玄関があった場所に移動。

結 「この辺りが玄関」

浩史 「邪魔します」

浩史は軽くお辞儀をして引き戸を開けるふり。

結 「外開きだよ」

浩史 「え？うそ」

浩史、外開きで扉を開ける仕草。

結 「嘘」

浩史 「嘘かい」

結、引き戸を開ける仕草。

結 「ガラガラ〜こつちがトイレ。で、居間」

浩史 「お風呂は？」

結 「外」

浩史 「え？外？ 冬危険なやつだ」

結 「雪はそんなに」

浩史 「いや寒暖差で血圧が」

結 「ああ。ヒートショック。危険な風呂だ。デンジャー風呂」

浩史 「デンジャーバス」

結 「なんかそれだとあれみたい」

浩史 「何？」

結 「キアヌ・リーブスの映画」

浩史 「あー。なんだっけそれ」

結 「スピード」

浩史 「それだ」

結は居間のあったあたりまで進む。

結が恵子に向かって語りかける。

結 「ウチって結構広かったんだね」

恵子が結を見て。

恵子 「うん。平らにしてみるとね。納屋も潰してみたら案外ね」

結 「木も切っちゃたんだね」

恵子 「うん。そうなん」

浩史 「いや、大きい家でしたよ」

恵子 「覚えてますか？ 前に来た時」

浩史 「来る前にグーグルマップで見ました」

恵子 「……何？」

結 「インターネット」

恵子 「ああ」

恵子は興味をなくし、トングで火をならす。

浩史 「もったいないですよ。タヌキが住み着いちゃったんでしたっけ？」

恵子 「ハクビシン。そこらじゅう糞だらけでさあ。柱はかじるわ。誰も住んでない家を直すのさ」

結 「そりゃそうだ」

浩史 「お兄さんが亡くなってからずっと空き家だったんでしょ？」

結 「うん。お父さんは引間んち……亡くなるまでお姉ちゃんちでみてもらってたから。(恵子に) 最後にここに集まったのってお兄ちゃんのお葬式の時だっけ？」

恵子 「三回忌」

結 「そうだ。そうするともう四年前か。意外と賑やかだったよね？」

恵子 「勝治の三回忌？ そうだね。従兄弟とか結構ね」

結 「子どもの頃のこと思い出した。ウチ、お正月とかお祭りの時とかさ親戚が集まってたさ」

浩史 「うん」

結 「それが私らの代で無くなっちゃうなんて」

恵子 「親が二人とも鬼籍に入って、女兄妹が家を出て、残った長男が嫁も取らずに死ん

じまつて。そしたら、そういうもんでしょ？」

「ワン！ ワン！ ワン！」と犬の鳴き声が聞こえてくる。

結たちがその声の方へ振り向く。

小林かなんがやってくる。紐が伸びるタイプのリード。リードが伸びた先に犬がいる様子。

かな 「ほら、アツくん行くよもう」

かな、リードを引っ張るが、犬は動きたくないらしくその場に座り込んだようだ。

かな 「もー」

恵子がかんなを呼ぶ。

恵子 「かなちゃん」

かなは恵子に気がつき、挨拶する。

かな 「こんにちは……！」

かなは、恵子の近くにるのが結だと気がつき、恵子たちがいる場所に近づいてくる。リードが伸び、犬は姿を見せない。

かな 「結ちゃん？」

結 「久しぶり。かなちゃん。すごい！同じタイミングで帰省？」

恵子 「かなちゃんは戻ってきたんだよ」

結 「え？」

かな 「うん。Uターン」

結 「そうなんだ」

かな 「そちら、ご結婚した？」

結 「あ、うん。去年」

かな 「恵子さんから聞いてちゃった。おめでとつございます」

結 「ありがとう。あ、えっと浩史さん」

浩史 「鈴木浩史です」

結 「小林かなちゃん。幼馴染」

浩史 「そうなんですか」

かな 「男前つかまえたね！」

結 「いや、もう無理かなと思ってただけだね。タイミングだよね。かなちゃん  
は？」

かな 「浮いた話は全然」

結 「そっか……おばさん元気？」



かな 「死んじゃったんだ。一昨年」  
結 「え？うそ」

かな 「戻ってきてすぐの頃」  
結 「なんかごめんなさい」

かな 「ううん」

結 「そしたら今、あのお父さんと二人なの？」

かな 「そう、あのお父さんと二人。だから犬飼う事にしたんだ。息詰まっちゃうから」  
結 「そっか」

浩史 「なんてお名前の子ですか？」

かな 「え？」

浩史 「アックんってことはなんだろう？ アイくん？ アンディ？」

かな 「うちの？」

かなが犬がいるだろう方角を見る。

結と浩史も同じ方向を見る。

かな 「アヌビス」

浩史 「はい？」

かな 「うちの子の名前。アヌビス」

浩史 「アヌビス……いい名前ですね」

かな 「そう？」

恵子 「好きな犬？」

浩史 「ハイ」

結 「近所で、気になる子が散歩してるんだけど声かける勇気がないんだよね？」

かな 「さわってみます？」

浩史 「いいんですか？」

かな 「なんでしたら少しぐると回ってきます？」

かながリードを差し出す。

浩史 「わ、ほんとですか？」

結 「よかったじゃん」

浩史 「いい？」

結 「ちょっと回ってくるだけね」

浩史 「うん！」

かなは浩史にリードを手渡す。

浩史 「それではお預かりします」

かな 「どうぞ」

浩史が去る。

「ワン！ ワン！ ワン！」と犬の鳴き声が聞こえてくる。見覚えのない人間に対して警戒しているような鳴き声。

かな 「吠えられてるな」

結 「不審者と思われたか」

かな 「(犬に向かって) アツくん大丈夫！ その人は私の友達のだんなさん！」

二人は浩史が吠えられている姿を見て、結は笑い、恵子は少し心配する表情。

恵子 「大丈夫かさあ」

かな 「噛んだらごめん」

結 「噛むの？」

かな 「噛まない子だけど」

結 「それじゃまあ大丈夫じゃないかな」

恵子 「適当なんな」

かな 「(恵子に) なんかあるんですか？ 今日は？」

恵子 「何？」

かな 「結ちゃん帰ってきて」

恵子 「ああ。別に何ってこともないんだけどさ。帰ってくるっていうからさ、それじゃあ親族でご飯でも食べようかって」

結 「何も無いってことはないよ。家がなくなっちゃんだから」

恵子 「ああ、そうか」

かな 「あ、お家無くなってから初めて？」

結 「そう」

かな 「そっか」

かなながぐるりと黒沢家の家があった更地を見る。

かな 「見慣れた景色がなくなっちゃったんで私も驚いた」

結 「なんかフワフワしてる」

かな 「浩史さん、だっけ？ 今は向こうの家なの？」

結 「ううん。今は夫婦だけ」

かな 「帰ってくるの？」

結 「ないない。先はわからないけど……ないない」

かな 「結ちゃん帰ってきたら楽しいのにな」

結 「そっ？」

かな 「うん。あんまりつるむ相手もないしね」

結 「無理だよ。私も浩史も仕事あるし」

かな 「そっか」

結 「かなちゃんは何で帰ってきたの?」

恵子 「お父さんと仲直りしたんだ?」

かな 「安月給に耐えかねて、ですよ。意地張ってるのが馬鹿馬鹿しくなっちゃって」

恵子 「先月、雪が降った時もお父さんと二人して雪かきしてたじゃねえ?」

かな 「恥ずかしい」

恵子 「恥ずかしいことないでしょうに」

結 「帰ってこれてよかったね」

かな 「え? うん。少しの間だったけどお母さんとも暮らせたし。まあね。ここが嫌  
いってわけじゃないしね」

そうこうしているうちに黒沢和子がやってくる。田舎にそぐわない原色強めの派手な服装  
肩がけのポーチ。小ぶりのキャリーケースを手に持っている。

和子 「おわ! 本当に何にもないじゃないの!」

恵子と結、そしてかながその声に振り返り和子を見る。

結 「あ!」

和子 「あーあ」

和子は平らになった土地を見ながら、ポーチの中からポケットティッシュを取り出し、鼻  
を噛む。

かな 「こんにちは」

和子 「あれ?覚えてる!えっと」

かな 「小林です」

和子 「小林?」

恵子 「いいよ。こんな挨拶しねえでも」

和子 「なんだよ」

かな 「なんか、懐かしい。ね?」

結 「そう?」

かな 「うん」

和子 「あ、思い出した。かなちゃん!」

かな 「そうです」

和子 「あのおっかねえ親父んちの子」

かな 「そうです」

恵子 「真面目だったただだんべえよ」

和子 「アンタ、昔から人を見る目がないんだから」

恵子 「あんたは悪さして怒られてたんだんべ?」

和子 「子供に遠慮がねえんだよな。まだ元気なの?」

結 「ちょっと失礼でしょ?」

かな 「いいいいの。ピンピンしてます」

和子 「ああいう人の方が長生きだったりするんだよねえ」

恵子 「あんた何しにきたん？」

和子 「お言葉だね。悪い？」

結 「誰に聞いたの？ 今日集まるって？」

和子 「つぐみからなんとなく」

和子が恵子が持っている手土産の紙袋に目をやりつつ

和子 「ね、トイレってどうしたらいいの？ アンタんちまで行くの？」

恵子 「また無心？」

和子 「アンタ、私がいつでも金がないと思ってるんでしょ？」

恵子 「じゃ、貸した分は返しなよ」

和子 「アンタ、キツくなったわね性格」

和子が結の方を見る。

和子 「ねえ。そう思わない？」

結 「うーん」

恵子 「勝治の葬式の時貸したんは、いつ返してくれんの？」

和子 「よく覚えていなさること」

浩史が戻ってくる。伸びたリード。やはり犬の姿は見えない。

和子と恵子のやりとりが目に入り遠巻きに足を止める。浩史は和子を勝治の生前中に関係があった女性であると思いこむ。

恵子 「忘れるわけななかんべえよ」

和子 「この権利はいらないうことでチャラにしたじゃない」

結 「それは違う話だよ」

和子 「そうだったけ？」

結 「お金の話じゃなくて」

和子 「ああ、介護の見返りだ、この家は」

結 「そういう言い方ないでしょ」

和子 「取り繕ったってしょうがないでしょ？」

結の視線に浩史の姿が入り声をかける。

結 「おかえり」

浩史 「うん」

結 「吠えられた？」

浩史 「最初だけ。いい子でした」

かな 「ほんと？ (笑)」

浩史がかなにリードを返す。

かな 「じゃ、また。いつまでいるの？」

結 「夕方には帰るんだ」

かな 「そっか。またゆっくり会おうよ」

結 「うん」

かな 「それじゃまた」

恵子 「呼び止めて悪かったんね」

かな 「ううん」

浩史 「ありがとうございます」

かな 「散歩させたくなったらいつでも言ってください」

浩史 「ほんとですか？」

結 「そのために帰ってくるわけにはいかないよ」

かな 「ははは」

かなは手を振って去る。

和子は浩史を見つつ恵子に聞く。

和子 「誰？」

恵子 「結の旦那さん」

和子 「ああ、結、結婚したんだったよね？」

結 「そうだよ」

和子 「いい男じゃないの。40手前！そうでしょ？」

浩史 「あ、はい」

和子 「アタシ、男の歳はピンとくんの」

和子が結を見る。

和子 「何〜年下？ どこで捕まえたの？」

結 「どこだっていいでしょ」

浩史 「あの……もしかして勝治さんの」

和子 「うんそう。勝治っていうかねえ」

結 「和子」

浩史 「和子さん」

恵子 「私らの上の姉」

浩史 「上のお姉さん……あ、お姉さん」

和子 「お母さんだと思った？ ババアだから」

浩史 「全然！もっとお若いかと」

和子 「でしょう？ 私の方が若く見えるでしょ？」

浩史 「てっきりあれだと思っちゃいました」

結 「何？」

浩史 「亡くなったお兄さんがおつきあいしてた方？」

浩史の勘違いに和子と結、大笑いする。

和子 「アハハハハ」

結 「ははは。そうかそれでか、なんかそわそわしててさ」

浩史 「うん。なんだあ」

恵子 「そんなナリだから間違えられんだよ」

結 「和ちゃんとは20違っんだ、歳」

浩史 「そうなんですか！」

和子 「40過ぎの恥かきっ子なんだよね。この子」

浩史 「あ……はあ」

和子 「娘、娘と来てさ、でも男が欲しくてさうちの親。勝治でやっと男の子が生まれて打ち止めにしたんだけど。40過ぎてのご無沙汰のあれが当たって出来たのがこの子なの」

恵子 「余計なこと言っんじゃねえよ」

浩史 「なんとなくは聞いてます」

恵子 「トイレじゃねえん？」

和子 「そうそう。漏れそう漏れそう。アンタんちまでもたないかも」

恵子が地面の一点を指差す。

恵子 「そこ、トイレがあった場所」

和子 「いじわるだねえ」

和子が恵子の背中を叩く。

恵子 「痛った！」

和子 「こんなひらけたところで尻だせていうの？（浩史に）見たくないよねババアのケツなんて」

浩史 「え？ あーハハハ……」

恵子 「ほら行くよ。（結たちに）まだ見る？」

浩史が結を見る。

結 「うん」

和子 「早くもっ」

恵子と和子が会話をしながら去ってゆく。

恵子 「構わないってそこいらでしても」  
和子 「猥褻物陳列罪で捕まっちゃうよ。チンはないけど」  
恵子 「つまんないこと言ってるんじゃないよ」  
和子 「つまんなくても言っちゃうんだよババアだから」  
恵子 「すぐそこなんだから我慢しな」

恵子と和子が完全に去る。

浩史 「愉快人じゃのう」

結 「じゃろ？今どこに住んでるのやろ」

浩史 「そんな感じ？」

結 「前にあった時は九州の方だって言ってたけど。その前は長野で……引いた？」

浩史 「事前に聞いてなかったらやバめだったかも」

結 「ヒヒヒ。何、なんでそれで勘違い？」

浩史 「姉妹でも違うんだね」

結 「私と和ちゃん？」

浩史 「いや、恵子さんと」

結 「ああ。恵ちゃんは同じ隣組の幼馴染の実さんと結婚して、ずっとここだからね」

結は居間のあったあたりまで進む。

結 「お父さんお母さんが生きてたら孫の顔をさ、見せに帰って来たり……なんか考えてたなあ、昔」

浩史 「お姉さんたちには見せられるよ」

結 「見せられるかねえ」

浩史 「ゆいぽんのお母さんだって40過ぎでゆいぽんが出来たわけだし」

結 「そうだねえ。でもねえ」

浩史 「ん？」

結は右手の親指と人差し指をくっつけて「お金」のジェスチャー。

結 「不妊治療。かかりますよ」

浩史 「それは今は考えないでつき込む」

結 「ギャンブラー」

結は部屋の間取りを思い出しながらとことこと歩き回る。  
ふと、浩史を見て

結 「子ども、出来なかったらさ」

浩史 「出来るって」

結 「犬を飼おうよ」  
浩史 「……出来るって」

浩史は犬を飼っている姿を想像し、ニヤッと□元を綻はせる。

結 「ニヤリ？」

結が浩史の□元を指差す。

浩史 「え？ 顔、出ちゃった？」

結 「うん（笑）」

浩史 「ペット禁止じゃないウチ」

結 「引っ越せばいいさ」

浩史 「まあ、そうか……いや、できるって」

結 「犬欲しくないの」

浩史 「そしたら犬も飼う」

結 「子どもに犬に引っ越し？」

結は右手の親指と人差し指をくっつけて「お金」のジェスチャー。

結 「かかりますよ」

浩史 「がんばろ」

結 「まかせとけじゃ？」

浩史 「がんばろう」

結 「え」

結は再び家があった場所を見るようにして

結 「ここが残ってたらなあ」

浩史 「え？ 通うの？ここから？」

結 「いないこともないんだよここから東京に通ってる人」

浩史はここから通勤する姿を想像してみる。

浩史 「いや、無理無理」

結 「そっかな？……（笑）そっだよね」

恵子と和子、そして引間優一がやってくる。

優一はアルバイトの休憩中に家に食事に戻ってきているため、アルバイトしているコンビニの制服を着ている。



結 「あれ？ 優一くん」

優一 「おばさんこんちわ」

結 「今帰ってきたの？」

優一 「そっただけど？」

結 「どこのコンビニ？」

優一 「野上の交差点のところの。飯食いに戻ってたところ」

結 「ああ昔からあるところ？ 結構、距離あるじゃない？」

優一 「節約節約。おばさんたちが揃ってるっていうからさ、ちょっと聞いて欲しいんだけど。何から言えばいいのかなあ」

和子 「なにさ」

優一 「うーんとねー」

結 「何系の話？」

優一 「この土地の今後の話」

結 「この？」

優一 「ぶっちゃけると電車を買ってここに置こうと思ってるんだ」

和子 「……何？ どういうこと？」

結 「電車？ 何？」

優一 「電車の車両を買って、置くのね。で、海の家みたいに椅子とテーブル並べてさカフェにするの」

結 「カフェ？」

優一 「うん。どうかな？」

結 「どうかな？ って？」

和子 「優一がそれ、コーヒー出すの？ マスターするの？」

優一 「いや、俺はやらない。そういうの向いてないから」

和子 「じゃ、どうすんのさ」

恵子 「夢の話よ。聞き流して」

優一 「仲間の中にやりたいって子がいるからさ」

和子 「共同経営？」

優一 「俺はオーナーってどこ」

浩史 「採算は取れそうなんですか？」

優一 「別に俺はね。カフェがやりたいわけじゃないんだけど、鉄道車両があるだけじゃ商売にならないでしょ」

和子 「どういうこと？」

恵子 「どっちが先って言ったら電車置きたいだけなんよ、この子はさ」

和子 「電車？ 電車って何？」

恵子 「電車は電車だよ」

和子 「走ってる？ やつ？」

恵子 「大概走ってるでしょ」

和子 「『切符拝見します』の、電車？」

恵子 「まあそっだいね」

和子 「その電車とこの場所と関係があるの？」

恵子 「だから電車を置きたいんだと」  
和子 「どういうこと?」

優一 「おばちゃん。電車はさ買えるんだよ」

和子 「そっからわかんないね」

優一 「わかんないかな」

浩史 「払い下げ車両というかもう、使用しなくなった車両を買ってこと?」

優一 「そう!」

結 「売ってるの? そんなの?」

優一 「いつもってことはないけど、たまにそういうの売りますとかあげますとかの告知が出るの鉄道会社から。それ買って、置いたらさ。人がくると思わない?」

結 「え? ……うーんどうなんだろ」

和子 「タダでもらえるの?」

優一 「そう。鉄道会社で処分するにもさお金がかかるから取りに来てくれたらあげますみたいなものもあるんだ」

和子 「タダならもらい得だよね」

恵子 「まず運ぶのに金がかかるの」

和子 「線路走らせてくればいいじゃない」

恵子 「そういうわけには行くもんかい」

和子 「そういうもん?」

恵子 「それにしたって最後はここまで車で運ぶんでしょ? そうすると何百万もかかるんだと」

和子 「運ぶだけで?」

優一 「うん。だからさ、まずは俺、働いて金貯めるから。それまで、この土地、売らないでさ、置いておいて欲しいんだ。いい?」

結 「え? ……いいも何も、私と和子姉ちゃんは相続放棄して、あんたたちのお母さんが引き受けたんだから。あんたたちのお父さんとお母さんがいいっていうならいいんじゃないの? ねえ?」

和子 「まあねえ」

優一 「それでもさ。おばちゃんたちとうちの母ちゃんの家だったところからさ。ちゃんと言ったかないと、と思って。来てるっていうからさ」

和子 「SLとかのが見栄えがいいんじゃない」

優一 「おばちゃん。SLは高いの。億するの」

和子 「そうなの」

浩史 「銀行に話に行ってみては?」

優一 が浩史を見る。

浩史 「お金が貯まるまで土地を遊ばせてるのも勿体無いじゃないですか。あ、クラウドファンディングは? 鉄道とかお好きな方は結構いるみたいだからやり方次第なら結構、成功確率高いんじゃない?」

優一 「そういうの詳しいですか? あんまり詳しい奴がいなくて」

浩史 「詳しいというか。詳しい人が知り合いにいるけど」

優一 「聞いてもらえませんか？」

浩史 「うん。いいですよ」

恵子 「あんたご飯途中でしょ」

優一が自身の腕時計を見て。

優一 「あ、やべえ。あの、じゃあいいかな？ 俺のプラン」

結 「あ、うん」

結が和子を見る。

和子 「いいわよ。どうでも」

優一は笑顔を見せた後、浩史を見る。

優一 「今度また聞かせてください」

浩史 「はい」

優一、去る。

和子 「なんかどっかで見たわそういえば。電車。公園で」

結 「王子？」

和子 「どこだっけ」

浩史 「川崎の方？」

和子 「どうだったかな」

恵子 「(浩史に) 余計なこと言わなくていいですから」

結と和子、浩史が恵子を見る。

恵子 「クラウドなんとかとか、変な知恵つけさせないでやってください。あの子はその気になってますけど」

和子 「何？ 反対なの？」

恵子 「反対はしないさ」

和子 「じゃ何？」

恵子 「貯めた金でやるならいいさ。借金してまでやることないよ」

浩史 「クラウドファンディングは投資なのでリスクは少ないと思いますけど」

結 「うまく行くとは思えないもんね」

和子 「そう？ いいんじゃないの案外」

結 「来ないって。電車飾るぐらいじゃこんなとこに人なんか」

浩史 「やってみないとわからないんじゃない？」

結 「この出じゃないからそんなこと言えるんだよ浩史は」

浩史 「んーまあねえ。でもこの広さはちよつと考えちゃうよね」

自動車がやってくる音がする。近くで停車したようである。

自動車のドアの開閉音が聞こえる。

結 「こんな山の近くじゃ広くても」

浩史 「結構有料道路の近くだし、やりようじゃない？ 住んでた頃はなかったんで

しょ？ 有料道路」

結 「そっただけど……」

自動車から降りた引間つぐみが歩いてくる。

和子が大きく手を振る。

浩史が軽く会釈した後、結に「誰？」と耳打ち。

結 「つぐみ。恵子姉ちゃんちの子」

つぐみやってくる。白いスニーカー。手に洋服店の厚手のビニール袋（中に和子の忘れ物が入っている）。

つぐみ 「こんちわ」

浩史 「どうもご無沙汰です」

結 「（つぐみに）忘れてたのよ」

つぐみ 「一回会っただけだしね」

浩史 「イメージが違うから。髪なんかくりつくりで」

浩史は自分の耳元で巻き髪を表現する仕草。

結 「言い訳」

結は浩史を見て笑う。

つぐみ 「……」

恵子 「帰ってくるなら連絡よこしなよ」

つぐみ 「和子おばちゃん来てるって言うから。これ、こないだ来た時の忘れ物」

和子 「ああ、ありがとありがとサンキューベリマッチ」

和子がつぐみから袋を受け取る。

恵子 「（和子に） つぐみんとこ泊まったの？」

和子 「新潟の方で住み込みの仕事が決まってさ、 つぐみんとこからだと新幹線乗れる

じゃない？ そんな時さ、下着をついさ、洗濯カゴ入れちゃって」

恵子 「そんなのわざわざ持って来なくたって」

和子 「シルクなんだよ？」

恵子 「知らないって」

和子 「そっだ、つぐみ、忘れないうちに」

和子はポーチからお土産物が入った紙袋を取り出す。

和子 「ほれ」

つぐみ 「お駄賃？」

和子 「京都のあぶらとり紙」

つぐみ 「お小遣いがいいな」

和子 「そんなの私が欲しいわ」

つぐみ 「ありがとう」

つぐみがお土産物の紙袋をしまいつつ

つぐみ 「寒くない？ 何やってんの？」

和子 「電車の話」

つぐみ 「ああ。お兄ちゃんの」

和子 「あんたは賛成なの」

つぐみ 「バカだなんて思うけど。お兄ちゃん働き出したし。いいんじゃない」

和子 「ニーサだったの？ 優二」

浩史 「面白いと思いますけどね。ニートですよね？」

和子 「何？」

浩史 「ニーサは株のアレですよ」

和子 「え？」

結 「うまく行くわけないよ」

浩史 「聞くだけ聞いてみるよ、詳しいやつに？」

恵子 「大丈夫ですから」

浩史 「でもクラウドファンディングなら」

つぐみ 「無理無理」

浩史 「一緒にやるって人もいるんですよ？」

恵子 「会ったことない人と店なんてできるんですかね？」

浩史 「会ったこと無い？」

恵子 「ええ」

浩史は優一の仲間というのがインターネット上での知人だと悟る。

浩史 「……SNSのフォロワー？」

つぐみ 「ツイッターの」

浩史 「ツイッター、いや今はエックスか……それは、うーん。難しいかもしれない」  
恵子 「ここで商売なんてあんまり考えたく無いですね」  
和子 「売るの？ やっぱり」  
恵子 「買い手がつけばいいけどね」  
浩史 「え？ そしたら優一さんの電車は？」  
つぐみ 「買えっこないって」  
浩史 「もし、買えてしまったら？」  
恵子 「だったらうちの庭にでも置けばいいさ」  
浩史 「なるほどお……」  
結 「もうちよっと現実味のある話ならなあ」  
浩史 「だね」  
恵子 「あんたも何か考えてた？」  
結 「え？ いや、無い無い。そんなの。私の持ち物でもないし」  
つぐみ 「結おばちゃんに貸すの？」  
結 「借らない。借らない」  
恵子 「何さ、あんた？」  
結 「うーん。なんだろうね」

会話が途切れる。

和子 「私も一ついい？」  
恵子 「何？」  
和子 「ん……やっぱりなんでもない」  
恵子 「何だよ」  
結 「らしくない」  
和子 「そう？ あのさあ……言いにくいんだけどさ……私にはないのかな？ 羊羹？」  
つぐみ 「ヨウカン？」  
浩史 「あ！すみません。気が利きませんで、あります。すぐお持ちします」

浩史が車に羊羹を取りに行こうとする。  
結が浩史に駆け寄る。

結 「ちょっと。あれは鈴木の家を持ってく予定のやつでしょ？」  
浩史 「また買えばいいって。小田急にも京王にも入ってるんだから！」  
結 「アタシの財布？ それ」  
浩史 「出す、出すから」

浩史、にこやかに和子たちの方を見て

浩史 「すぐ持って来ますから」

浩史が去る。

結が浩史を見送りつつ、ゆっくり姉たちの元に戻る。

恵子 「姉貴のそういう品のないねえとこ、ほんと嫌！」

和子 「あんたが言えって言ったんでしょー？」

恵子 「言うか？ 普通。急にヨォー！」

和子 「あの羊羹じゃなかったら言わなかったって！」

恵子 「私に言いなよ。分けてやったんに！」

和子 「それだって下品だとか言うくせに！」

恵子 「言っさ、そりゃー！」

結 「羊羹なんか買わなければよかった」

和子 「なんかごめんね気を遣わせちゃって」

恵子 「ほんとだよ」

結 「クッキーのアソートにしとけばよかった。そっちの方が安かったし」

和子 「あの羊羹は我慢できないのよ私」

恵子が和子を睨む。

和子はその視線を避けるようにして少し離れた場所に歩いてゆく。

ポーチから電子タバコを取り出して吸おうとして、つぐみを見て思いとどまる。

恵子もポケットからタバコの箱を取り出し、タバコを一本くわえる。

和子 「ちよちよ（ちよっとまった）」

つぐみがそのタバコを奪い取り、一斗缶ストープの中に投げ捨てる。

恵子がつぐみを見る。

つぐみ 「やめてタバコなんか」

恵子 「よかんベェよ」

つぐみ 「似合わねえって言うてんの」

恵子 「まあねえ。わかってるよ」

つぐみ 「死に急がないでよ」

恵子 「タバコの本一本二本で死にやしないって（全く）今の子はヨォ。それにさ、いつ死んだっていいんだよ私らなんかは」

つぐみ 「ふざけんなバカ！」

結はつぐみの顔をみて謝る。

結 「ごめん。お母さんが不良になっちゃったのはみんなおばちゃんたちが悪いの。おばちゃんたちがさ、みんなあんたのお母さんにおじいちゃんのお世話任せちゃったからさ。恨むんならおばちゃんたちにして。お母さんを怒らないであげて」

つぐみ 「なんで、そういうことになったんですか？」

結の携帯電話に着信。

結が画面を確認する。職場からの電話。

結 「ごめん。ちょっと仕事の電話」

つぐみ 「……」

結は電話に出るために、恵子たちから距離をとる。

結 「(電話の相手に) はい、鈴木です。いえいえ大丈夫です」

つぐみが結を見つつ

つぐみ 「お父さんとお母さんがどれだけ大変だったか。分かってないんだよ」

恵子 「あんただって、大したことやってねえべよ。勝手に怒ってんじゃないよ」

つぐみ 「だって」

和子 「まあまあ。わかってるよなあつぐみはいい子だもんね」

和子がつぐみの頭を撫でる。

つぐみ 「もう27なんだけど」

和子 「え？ そんなになるんだっけ？ そっか」

和子が恵子を見て、つぐみを見る。つぐみに対して「ちゃんと言える？ 私、言おうか？」  
というような視線。

つぐみ 「大丈夫だよ」

和子 「ならしいけど」

恵子 「何？」

和子 「別に」

和子が見る。

和子 「優一も結も好きだよねえこんなところがさ。あたしはあの人の介護なんてまっぴらごめんだったわ」

つぐみ 「おじいちゃん？」

和子 「うん。よく叩かれたからね。何かっちゃあ」

恵子 「そりゃ、あんたが悪さすつからでしょ？」

和子 「だからってさ。青くなるまで叩くことねえでしょうよ」

つぐみ 「おじいちゃんが？」



恵子 「アタシらの子供の頃は普通だったんだよ」

和子 「普通じゃないね。結には手を出さなかった？ よね？」

恵子 「年取ってからできた子だったから。可愛かったんじゃない？ それに勝治とだいぶやり合った後だったしね」

和子 「それはよかった。ごめんね。姉貴らしいことは何もしてやれなくて」

恵子 「姉貴みたいになれたらなって思ったこともあったよ」

和子 「え？ほんと？ いつ？」

恵子 「割と最近。全部放り投げてどっかに行きたいなって。でもすぐにさ、いくら憎い親だからって顔も出さねえとか金借りたまま、悪びれもしねえとかさ。そんな私は出来ねえからさ。姉貴みたいにはなれねえなって思ったんだよ」

和子 「……それ、私。あれだよ。悪口言われてるよね？」

恵子 「そんなことねえよ」

和子 「あるよ」

実と静枝、浩史がやってくる。

羊羹を取りに行った浩史が静枝を連れて戻ってきた実と合い、一緒にやってきている。

静枝はハイキングに行くような格好。背にリュックサック。

浩史の手には羊羹屋の紙袋。

電話をしながら結が三人に大きく手を振る。

浩史が結と同様に手を振り、静枝は軽く振り返す。

三人、恵子たちの元へ。

和子 「静枝ちゃん！」

静枝 「どうも久しぶり〜」

実 「和子さんも来たん？」

和子 「ダメだった？」

実 「そういうことじゃなくてね」

和子 「つぐみが忘れ物届けてくれたの」

実 「(つぐみに) 来るなら来るって言うてくれよ。出前、とってねえぞ」

つぐみ 「いいよ。そんなの。すぐ帰るから」

実 「そういうわけにはいかねえんべえよ」

和子 「出前取ってるの？」

恵子 「うん。うなぎ」

和子 「私もないよね」

恵子 「うん。来るなんて知らなかったから」

実 「優一の方で頼んだのかあるだんべえや」

恵子 「優一だってアルバイトから帰ったら食べるんべえよ」

静枝 「私、大丈夫だよ」

実 「そうはいかねえよ(恵子に) 追加できねえか聞いてんべえか？」

恵子 「もう作り始めてるんじゃないかねえ。聞いてみるけど」

恵子はスマートフォンを取り出し、鰻屋に電話しようとする。

恵子 「(和子に) 食うん?」

和子 「いいの?」

恵子 「3800円」

和子 「え? 自腹?」

実 「いいいいよ。(恵子に) 意地悪いもんじゃねえよ」

恵子が少し離れて鰻屋に電話。

恵子 「もしもし。出前頼んでた引間ですけどね。あと二つ鰻重追加ってできますかね?」

和子が静枝に声をかける。

和子 「ちょっと驚いちゃったんだけどさ」

静枝 「何?」

和子 「あっちから歩いてくる姿がさ、あれ? お母さん? お母さんが歩いてくるって思っちゃった」

つぐみ 「おばあちゃん?」

和子 「うん。そこまで来て、あ、静枝ちゃんかって」

静枝 「姉妹だもん」

電話を終えた結が和子たちに合流。

結が静枝に背中から抱きつく。

結 「静枝ちゃん!」

静枝 「おっとっと。結ちゃんお久しぶり」

結 「静枝ちゃん」

和子 「(結に) 静枝ちゃん、お母さんに似てきたって思わない?」

結 「和ちゃんもそう思った? だよね」

静枝 「そう?」

結 「お母さんが死んでから、なんか急にそっくりだなんて」

浩史 「DNAが一緒だからやっぱり似てるんじゃないですか?」

つぐみ 「死んじやったおばあちゃんの代わりってこと?」

結 「そういうんじゃないって」

つぐみ 「そうじゃん」

静枝 「それでも慕われてるのはありがたいよ。姪っ子に嫌われるよりは」

結 「そうだよね……」

つぐみは自らのスマートフォンで何かSNSを見ている。

和子が浩史と結のそばへ。

和子が浩史の持っている羊羹の紙袋を指さして

和子 「それ私のじゃないの？」

浩史 「渡すタイミング測ってました。お姉さんのです」

浩史が和子に羊羹の紙袋を手渡す。

和子 「あー良かった」

結 「静枝ちゃんの分はちゃんと買ってあるから」

静枝 「気を使わなくていいのに」

実 「相変わらず面白えんな。和子さんはよ」

恵子が電話を終えて戻ってくる。

恵子 「まだ焼く前だったから追加大丈夫だって」

静枝 「良かった」

結 「何？」

和子 「うなぎ」

結 「何？」

浩史が結に状況を説明する。

恵子 「そろそろどうだい？ ウチに行ってお茶でもいれようか？」

結 「あーうん……どうしょ？」

静枝 「お茶だったら、私、ちょっとここ借りてもいい？」

恵子 「何？」

静枝 「水筒にお茶入れてきたんだ。ここでさピクニック気分？」

恵子 「構わねえけど。こんなところで？ 脇を車も通るで？」

静枝 「ここんちが平になってからさ。一回、やってみたかったんだ」

和子 「何茶？」

静枝 「普通のダージリンだよ」

和子 「紅茶」

静枝 「飲む？」

和子 「飲む！」

静枝 「紅茶でもいいの？」

和子 「なんでもいい。温まりたい」

結 「私たちも一緒にいい？」

静枝 「もちろん。じゃ、ちょっとシートひくの手伝って」

静枝と結、浩史、和子が一斗缶ストープから離れて場所を探す。

静枝 「この辺にしようか」

静枝はリュックサックからレジャーシートを取り出す。

浩史 「やります。やります」

浩史と結 レジャーシートをひく。

その様子を見ている恵子、実、つぐみ。

実 「おまゝことでも始めるようだな」

和子 「つぐみ。あんたは」

つぐみ 「いいや」

レジャーシートをひき終わり、静枝、結、浩史がそこに座る。

和子はそばに立っている。

静枝がリュックから水筒と紙コップを取り出し、紅茶を人数分注ぐ。

和子 「準備いいね」

静枝 「誰か飲むかって。一人でも良かったんだけどね。どうぞ」

浩史 「ありがとうございます」

結と浩史、和子が紙コップを受け取り口をつける。

結 「美味しい」

浩史 「うん」

和子 「あったかい」

静枝 「少し寒いけど。いいねえ」

結 「ね。和ちゃん羊羹食べよっか？それ」

和子 「え？」

和子は羊羹の紙袋を後ろ手に隠す。

和子 「うなぎ食べるっていう前に羊羹はよくないんじゃないかな」

結 「あ、そう」

浩史 「(笑)」

静枝はおもむろに俳句を一句読む。

静枝 「大空へ続く更地を鳥帰る」

和子 「俳句？」

静枝 「うん。和子ちゃんもどっ？」

和子 「え？ 無理無理」

静枝 「なんでもいいんだって。今の気持ち。はい」

和子 「飲みたいなうなぎのお供にいいお酒」

結 「和ちゃん」

和子 「いいでしょ」

結 「俳句じゃなくない？」

静枝 「ううん。うなぎは季語。いいじゃない」

和子 「でしょ？」

静枝 「夏の季語だけどね」

結 「ハハハ」

浩史 「静枝さんは方言出ないんですね？」

静枝 「ん？」

浩史 「『だんべえや』って。結さんもたまに出るんですよ」

結 「こっちの知り合いと電話してる時とかね」

静枝 「私はここの生まれじゃないから」

浩史 「あ、そうなんですか」

結 「お母さんの方の実家は浦和の方って言わなかったっけ？」

浩史 「あ、そうか。お母さんの妹さんなんだもんね」

静枝 「40過ぎてからこっちに越してきたのよ」

和子 「こんなところに。物好きだよね」

静枝 「いいところじゃない。ウチから歩いて登れる山もあるし。穏やかで。お姉ちゃん  
いいとこに嫁いだなってずっと思ってたから。うちの人が亡くなってその時は東京  
に住んでただけど。意味なくなって。だったらここにしようかって」

恵子と実、 つぐみは一斗缶ストーブで暖をとっている。

つぐみ 「お父さんはいいの？」

実 「何？」

つぐみ 「お母さんがタバコ吸ってるの」

実 「んーやめた方がいいけども。今はな」

つぐみ 「なんで？」

実 「そんだけおじいちゃんのお世話は大変だったんさあ」

つぐみ 「ストレス？」

恵子 「わかんねえけど」

実 「好きにしてもらうんべえよ」

つぐみ 「じゃ、私の前で吸うのはやめて。私、赤ちゃんできたから」

恵子と実がつぐみを見る。

実 「何？」

恵子 「赤ちゃん？ 妊娠したん？」

その言葉に結と浩史、和子、静枝も三人の方を見る

つぐみ 「した」

恵子 「あんた彼氏なんていたん？」

つぐみ 「まあ」

恵子 「智也くん？」

つぐみ 「そんなのとづくに別れた」

実 「おい、そのともやってえのも俺や知らねえで」

つぐみ 「言ってないからね」

実 「お前、結婚するん？」

つぐみ 「わかんない」

実 「子供ができたんじゃするんだんべエや」

つぐみ 「絶対じゃないでしょ」

恵子 「相手の人は妊娠したって知ってるん？」

つぐみ 「まだ話してない」

実 「なんだいそりや話せねえような相手なんけえ？」

つぐみ 「おっきな声出さないでよ。そんなんじゃないって。先週分かったばかりだから」

恵子 「お付き合ってるんじゃないあ分かったらすぐ伝えるもんでしょう？」

つぐみ 「二人して面倒くさいな。話すんじゃないかった」

実 「なんだって？」

つぐみ 「もうさ、子供じゃねえんだから私の好きにさせて」

実 「そういうわけにもいかんべエよ」

結が立ち上がり遠巻きに三人の会話を聞いている。

恵子 「まずは相手にできたって伝えてよ」

実 「そうだよ。一回連れてきてみ」

つぐみ 「早いつて」

実 「はええことねえだんべえよ！」

つぐみ 「結婚前提で話しないでよ」

実 「結婚しねえで子どもどうするんさ。一人で育てるんけえ？」

つぐみ 「そうかもしれないし。まだ産むとも決めてないし」

実 「はあ？」

結は恵子たちと静枝たちの間、中間地点あたりでつぐみに向かって声をかける。

結 「産んだほうがいいって」

つぐみと恵子、実が結を見る。

結 「後悔すると思う」

つぐみ 「結ちゃんには関係ない話なんだから口挟まないでもらえます?」

結 「でも」

実 「悪いんね」

結 「あ、うん」

和子 「結ももう一杯飲む?」

浩史が結を迎えにゆく。

浩史が結の手を握り

浩史 「家族のことだからさ。ね」

結 「……うん」

二人、静枝たちのところに戻ってゆく。

和子 「つぐみが決めることだからさ」

かなながやってくる。

結 「かなちゃん?」

かな 「早い再会（笑）実さん。近所に丸聞こえ」

かなは恵子たちのところに向かう。

実 「お騒がせして悪いんね」

かな 「ううん」

つぐみが無言で去ろうとする。

恵子 「どこ行くん?」

つぐみ 「帰る」

実 「話は終わってねえで」

つぐみ 「近所迷惑なんですよ」

実 「そんな子どもじみた態度じゃあ結婚なんて認めらんねえで」

つぐみ 「結婚認めてほしいなんて言ってるねえべんよ」

かな 「まあまあ」

かなはつぐみの手を取り、実と恵子のもとに連れ戻す。

かな 「ちゃんと話。したほうがいいって」

つぐみ 「おせっかい。やめてもらえます?」

恵子 「つぐみ」

つぐみ 「うちの話なんで」

かな 「そっだよね」

和子 「かなちゃんもどう？ こっちでいっぱい飲まない？ アルコールじゃないけど？」

かなが和子を見る。

かな 「ありがとうございます」

かなは再び、つぐみたちを見て

かな 「私、関係ないけどさ。ちゃんと話、した方がいいよ。いいと思うよ。話してみないとさ、相手のことって案外わかってなかったりするからさ」

つぐみ 「そんなことない」

かな 「面倒くさがってるのもっと面倒くさくなるもんだからさ。実さんもさ感情的にならずにつぐみちゃんの話聞いてあげてよ」

実 「こいつがこんな態度じゃ、そっもいかねえで」

かな 「実さん」

実 「何？」

かな 「私、10年近く東京行ってたでしょ？ あれ、お父さんに反対されて、結婚ダメになったからなんだ」

実 「……」

恵子 「そうだったん？」

かな 「うん。あつたまきちゃって。許せなくて。出て行って……やっと最近帰ってきたってわけなんですよ」

実 「……かなちゃん、そういう話はずりい（狡い）で」

かな 「（笑）」

恵子 「（つぐみ）あんた今日は泊まっていけねえん？」

つぐみ 「明日仕事ある……けど、こっちからいけないこともない」

恵子 「お母さんはさ。好きにすりゃいいと思ってる」

実 「おい」

恵子 「こうは言ってるけどお父さんはあんたには甘いかな。結局は大丈夫だよ」

実 「そっなことねえで」

恵子 「事情もわかんねえんじや、何にもわかんねえからさ。な」

つぐみ 「……うん」

結、涙が出る。

結 「う……」



恵子、つぐみ、実とかなが結を見る。

恵子 「あんた何泣いてるん？」

結 「だって。だってさ〜う〜……」

浩史が結のそばへ

浩史 「なになになに？」

結 「……」

浩史が結の手を握る。

浩史 「なになにどうしたの？」

結 「わかんない」

浩史 「家無くなったの、寂しくなっちゃった？」

結 「それは今日ずっと思ってた」

浩史 「つぐみちゃんに赤ちゃんできたこと？」

結 「それもある」

浩史 「それだけじゃないの？」

結 「それだけじゃない」

浩史 「どんなこと？ 何が悲しくて泣いてるの？」

結 「……わかんない！〜う〜」

浩史 「わかんないか」

浩史は結の肩を抱き、あやすようにゆする。

つぐみ 「おばちゃんてあれに似てるよね」

恵子 「何？」

つぐみ 「ちいかわ」

恵子 「何？」

浩史は結を慰め続けている。

浩史 「寂しいね。寂しいねえ」

つぐみがその様子をスマートフォンで写す。

つぐみ、自撮りモードにして自分も画像に入るようにして。

恵子 「何とってんのさあんた」

つぐみ 「お母さんも」

恵子 「え？」

つぐみ 「ピース」

つぐみと恵子ピースサインをして遠くに結と浩史を収めつつ画像を写す。

結は気持ちを落ち着かせつつある。

和子が恵子たちの元へやってくる。

和子 「ねえ、みんなで撮ってよ」

つぐみ 「いいよ」

かな 「撮りましょうか？」

つぐみ 「……お願いします」

かな 「はい」

スマートフォンを構えるかなの前に画像に収まるだろう距離を置いて一同が並ぶ。

結 「テレビの部屋、この辺りだったでしょ」

和子 「あんたそんな顔で平気？」

結 「え？」

結は化粧崩れを気にする。

恵子 「居間があったあたりだね。確かに」

かな 「とりますよー」

かながシャッターを切る。

かな 「もう一枚」

かなが再びシャッターを切る。

かな 「はい。大丈夫かな？」

かながスマートフォンをつぐみに返す。

和子が一斗缶ストーブの元に戻ってくる。

和子 「撮ったのラインでちょうだい」

つぐみ 「うん」

つぐみがすぐさまスマートフォンを操作して和子に画像を送る。

正午になる。町の防災行政無線から12時のチャイムが鳴る。

チャイムはシュールベルト「野バラ」のメロディ。

実 「ハア（もう）12時か。そろそろ家人るんべえ。出前もくるんべえよ」  
恵子 「かかるよまだ」  
実 「もっさみいからよ。風邪ひくで」  
和子 「チャイムこの曲だっけ？」  
恵子 「そうだよ」  
和子 「あれ？ 秩父音頭じゃなかったっけ？」  
静枝 「今はこれだよ」  
和子 「変わったんだ」  
恵子 「流れることもある。気がすっけど」  
実 「あれだい。8月に音頭祭りの頃だけ流すんじゃないかな？」  
浩史 「お祭りがあるんですか？ あ、盆踊り？」  
かな 「そう。8月14日に」

和子がおもむろに秩父音頭の一振りを踊る。

和子 「案外覚えてるもんだ」  
浩史 「お姉さん踊れるんですか？」  
和子 「え？」  
結 「誰でも踊れるの。ここいらの人は」  
浩史 「結さんも？」

結が浩史から離れ秩父音頭の一振りを踊る。

浩史 「ほんとだ！ なんで？」  
結 「運動会でも踊るから」  
和子 「そうそう！」  
浩史 「運動会で」  
つぐみ 「中学の体育祭でもやる」  
浩史 「つぐみちゃんも踊れるの？」  
つぐみ 「え？」  
恵子 「踊れるだろ？」

恵子が秩父音頭の一振りを踊る。

つぐみも恵子に合わせるようにして秩父音頭の一振りを踊る。

和子 「（恵子に）あんた覚えてるんだ？」  
恵子 「当たり前じゃねえけえ」  
浩史 「え？ 僕も覚えなくちゃいけませんかね？」  
実 「別に覚えることはねえですよ」  
浩史 「実さんは踊れないんですか？」

実 「踊れますよ」

実も秩父音頭の一振りを踊る。

浩史 「踊れるんだ!」

結 「だから、習わされるんだって、で、輪になって踊るの」

結が姉たちを見て

結 「ちょっと輪(になって)」

つぐみ 「は? なんで」

和子 「いいじゃんいいじゃん」

和子は恵子とつぐみをうながし、一斗缶ストーブを中心に半径1・5メートルくらいに前後等間隔になるように輪になるように立たせる。

結も輪に加わる。かなと実、静枝は加わらない。踊るのは和子、恵子、結、つぐみ。

和子 「1、2、3でいい?」

結 「うん」

和子 「オーケー。行くよ! 1、2、3!」

四人が同じ振りで踊り始める。かなが手拍子を叩く。  
一踊りしたタイミングで静枝が秩父音頭を謡い始める。

四人は踊りを続ける。

合間に実と和子が「コラショ!」と合いの手を入れたり。

1番を歌ったあたりで踊りも手拍子もやめる。

結 「静枝ちゃんどうしたの? うまいね」

静枝 「ちょっとね。昔。覚えてんだ」

浩史 「皆さん歌えるんですか?」

和子 「歌詞はわかるけど静枝ちゃんみたいには歌えない歌えない」

恵子 「なんでわざわざ?」

静枝 「良いじゃない? 地元に民謡があるのって」

恵子 「そっ?」

静枝 「ここの生まれの人は当たり前だもんね。あたしは選んでここに住み着いたからさ」

結 「どういうこと?」

静枝 「好きだから。好きだからなんだ? えーと?」

静枝は少し考えてから

静枝 「やりたいことを選べば良いんだよ」

結 「……私、後悔したんだ」

浩史 「何？」

結 「ハクビシンなんか荒らされないようにもつと気をかけてれば良かったって。月に一回でも帰ってきてさ。掃除したり。手入れしたり」

つぐみ 「ハクビシンで何？」

和子 「ハクビシンが住み付いてたんでしょ？家？」

つぐみ 「ハクビシンでなんだっけ？」

つぐみが恵子を見る。

恵子 「私、火、みてから行くから、お父さん、みんなつれってって」

実 「そうすんべ。風邪ひくで」

和子 「そうしょ」

浩史 「（静枝に）たたむの手伝います」

静枝 「ありがとうございます」

恵子が一斗缶ストーブにトングを入れ、火の様子をみる。

浩史と結は静枝を手伝ってレジャーシートを片付ける。

結 「私、選べるようにする」

静枝 「そう。そっか」

浩史 「二人でだよ？」

結 「当たり前でしょ」

浩史 「だといいんですけど」

かなが実と恵子に声をかける。

かな 「じゃ、また。お邪魔しました」

実 「悪かったんね」

かな 「すみません。こちらこそ」

恵子 「タケノコ、ちっとももらったん、食べるけ？」

かな 「ほんと？」

恵子 「後で持ってくわ」

かな 「取り行ってくて」

恵子 「そう。悪いんね」

かな 「結ちゃん。今度こそまた」

結 「うん」

実 「じゃあいいかい？」

実を先頭に和子、結、浩史、静枝が引間家へ向かって去って行く。

かなは自宅に向かって去る。

去りながら、結の携帯電話に職場から電話がかかってくる。  
結が電話に出る。

結 「もしもし。はい。いえいえ。どうしました？ え？あの案件の〇になったんですか？」

恵子のもとにつぐみだけが残っている。

つぐみ 「秋の台風で屋根が飛んだんじゃないかなかったっけ？だから壊したって」

恵子がトングを動かす手を止める。

恵子 「びっくりさせないでよ」

つぐみ 「何？」

恵子 「いや、なんでも……アハハハハ」

つぐみ 「何？」

恵子 「まあいっか。ハハハハ」

つぐみ 「なんなの？」

恵子 「おばちゃんたちにはさ、ハクビシンだって言ってたんだ」

つぐみ 「ハクビシンってなんなの？」

恵子 「狸っていうかおっきなリスっていうか。まあハクビシン」

つぐみ 「それがなんなの？」

恵子 「それが住み着いてどうしようもないからおっ壊したって言ってるんだ」

つぐみ 「どういうこと？」

恵子 「ちゃんと掃除してたんだ。ハクビシンでも台風でもなくてさ。住もうと思えば住めたんだ」

つぐみ 「え？ そうなんだ」

恵子 「うん」

つぐみ 「じゃなんで？」

恵子 「なんでだろ。でも、おっ壊したくなってるさ。ねえ、さっぱりしたと思わない？」

つぐみ 「スッキリはしたけど……」

恵子 「あーさっぱりしたー」

恵子は両手を上げ、伸びをする。

つぐみ 「あのさ」

恵子がつぐみを見る。

つぐみ 「結婚するかはわかんないけど。産むから」

恵子 「あ、そう。そうか。それはまた夜に話すんべ」

恵子、笑う。

恵子 「水持って来る」

つぐみ 「何？」

恵子 「火を消す用」

つぐみ 「私持ってくる」

恵子 「いいって」

つぐみ 「まだ別に何があるってわけじゃないから。バケツどこ？」

恵子 「外の水道のところ。用意してあるから」

つぐみが去る。

恵子は一斗缶ストーブの火を消す前に一服しようとタバコの箱を取りだし、中の一本をくわえる。

恵子はトングで一斗缶の中の薪を動かし、タバコにちょうど良さそうな火を探す。

恵子 「……………」

恵子、気が変わって、くわえていたタバコを一斗缶ストーブの中に投げ捨てる。

恵子はポケットからタバコの箱を取り出し、ねじり、やはりストーブの中に投げ捨てようとして。

恵子 「……」

気が変わって、再びポケットに戻す。

恵子、笑う。

結と和子が戻ってくる。

結 「恵ちゃん」

恵子が振り返る。

恵子 「なんか忘れ物？」

結 「まだうなぎ来なそうだからさ」

恵子 「何？」

結 「先にお墓参り」

恵子 「ああ」

結 「静枝ちゃん花摘んでくるって。浩史もついてった」

恵子 「花はもう供えてあるで？」

結 「うん。でも摘んできたいからって」

恵子 「あ、そ。ちょっと待って、水が来るから」

和子 「水？」

恵子 「火」

恵子が一斗缶ストروبを指差す。

和子 「ああ」

和子 「さっきの写真、つぐみからもらったけどいる？」

結 「あ、欲しい」

和子 「私、登録してある？」

結 「してない」

和子 「どうするんだっけ？」

結は和子のスマートフォンを操作して、ラインで知人登録するQRコードを呼び出し。自分の携帯電話で読み込み。登録する。

結 「オッケー」

和子 「恵子、ついでだからあんたも教えてよ」

恵子 「全然やってないんだけど」

結 「やってはいるんだ」

恵子 「入れさせられた」

結 「ライングループ作ろうよ」

恵子 「何？」

結 「ちょっと貸して」

恵子が自分のスマートフォンを取り出し、結に手渡す。

結 「お姉ちゃんiPhoneなの？」

恵子 「勝手に決められたんだよ」

結 「なんかタッチできないんだけど？」

恵子 「壊れてる？」

結 「壊れてないよ。アップデート。iOSだと、え？ 和ちゃんわかる？」

和子 「聞かないでよ」

優一とつぐみがやって来る。

優一がつぐみのバケツを持ってやっている。

つぐみ 「あれ？ 何？」

和子 「先にお墓参り。手を合わせるの忘れてた」

結 「優一くんこれどうすればいいんだっけ？」



優一がバケツを置き、恵子のスマートフォンを受け取り、画面をみる。

優一 「え？ ああ、これはね」

和子 「優一、わかるの？すごいじゃない」

優一が恵子のスマートフォンを操作し、結に返す。

優一 「はい。これでアプリの色が明るくなったら使えるから」

和子 「すごいじゃん優一」

優一 「こんなの誰だってできるって。じゃあ」

結はスマートフォンを恵子に返す。

恵子 「行くの？ 仕事？」

優一 「うん。働かなきゃ」

優一が手を振って去る。

結 「終わった？」

恵子 「まだ」

つぐみがバケツを持ち、水を一斗缶ストープにかける。

和子 「冷た」

つぐみ 「飛んだ？ ごめん」

結 「(くしゃみ) くしゅん」

和子と恵子、結を見る。

結 「ごめん。花粉。葉きれてきた」

恵子 「シーズンだ」

結 「春はね〜」

結がマスクを取り出し、つける。

つぐみはスニーカーが泥まみれなことに気がつきショックを受ける。

つぐみ 「あー！」

和子 「あ、泥だらけー！」

和子と恵子、結もそれぞれ自分の履物に視線を落とす。泥がついているがつぐみほどは目立たない。

和子と恵子、結の三人が歩き出し、その後ろをつぐみがバケツを持ってついてゆく。  
和子は更地になる前に庭木が茂っていたあたりを見ながら

和子 「切っちゃったんだね、木もみんな」

恵子 「うん」

結 「桜も」

恵子 「昔ほど花をつけなくなってたんだ」

結 「そっか」

つぐみ 「お母さん。雑巾」

三人が振り返る。足は止まらない。

恵子 「そんな白いの履いて来るから」

三人はそれぞれで笑う。

和子 「美の山のは綺麗に咲くようになったじゃない？」

恵子 「なんで知ってんの？」

和子 「テレビでやってた」

恵子 「ああ、そうそうこの間ね」

結 「どれ？」

和子 「サンドイッチマン？」

結 「ああ。よくやってるよね。タカトシじゃない？」

三人が黒沢家の墓地があると思われる方向に去る。

つぐみは靴の泥を気にしながら

つぐみ 「サイアク」

つぐみが引間家の方向に去る。

舞台上には火の消えた一斗缶ストーブだけが残っている。

終わり